

留学報告書

私、3年電気制御システム工学科 平松信義は2011年8月末から2012年6月末までのフィンランドでの約10ヶ月間にわたる留学生活とその体験について報告いたします。

8月28日成田空港を出発し、僕の留学生活が始まりました。初日、パリを経由しフィンランドの首都ヘルシンキに降り立った時にはとても緊張していたことを覚えています。飛行機の中でも興奮と緊張で眠れず、各国のフライトアテンダントさんの方々とほぼ夜通しお話ししました。つたない英語でも何とか意思疎通を図ることができたように思います。空港にはそれから半年間お世話になるミラー一家のホストマザーと末っ子の7歳の男の子が迎えに来てくれていました。空港に到着後、すぐに車で数時間フィンランドで留学生活を過ごした街トゥルクに移動しました。移動中目に付いたのは、いたるところに茂る白樺の森でした。この木の枝の先を束ねた物を「ヴィヒタ」と言い、伝統的なサウナでは体をその枝でたたき血行を促進するために使うそうです。フィンランド人にとって森や自然はとても大切な存在で、憲法にも森を守るための項目がたくさんあるということを、その時ホストマザーから聞きました。この他にも、国民にはブルーベリーとマッシュルームを森に自由に入って摘む権利なども憲法によって保障されているそうです。そしてついに富山を出発してから丸2日やっと家に到着し、初めてホストファミリー達と顔を合わせました。和やかに歓迎してもらいホッとすると同時に、自分の考えていることが英語でもフィンランド語でもほとんど表現できず、初日は緊張と不安と長旅からくる疲労で押しつぶされそうでした。特にこの言語に関する苦労は留学生活を通じて、この後絶えず付きまとう事になります。

ここで、まずフィンランドと僕が滞在した街トゥルクについて簡単に説明したいと思います。フィンランドは約500万人、日本の約20分の1程度の人口を有する国で、面積は日本とほぼ同じです。公用語はフィンランド語とスウェーデン語、通貨はユーロを採用しており、首相は大統領の共和国です。トゥルクという街はフィンランドのほぼ最南端に位置し、かつてスウェーデン統治下でのフィンランドの旧首都でした。そのような歴史的な経緯からスウェーデン系フィンランド人やスウェーデン語系の学校がいまだ重要な地位を占めている、ある意味でいりくんだ国際色豊かな都市です。2011年には欧州文化首都(European Capital of Culture)にも選定され、かつフィンランドでは数少ない不凍港を有する街として、フィンランドの経済的、文化的、歴史的に要ともいえる都市なのではないでしょうか。交通網は電車の変わりにバスが発達しており、主に僕もバスで通学していました。

僕がフィンランドでお世話になった学校のルオスタリヴォリ高校には他の一般生徒から約2週間程度遅れて初登校しました。この学校は元女子高で、1学年に大体100人程度のフィンランドでは中規模の高校に相当します。またフィンランドの高校はすべて公立で、教科書は無料、学校によっては小型のノートパソコン程度なら貸与してくれるところもあるそうです。教育制度は日本での単位制のように選択科目と必修科目があり、学生はそこから決められた分履修しなければなりません。しかし留学生は特例ですべてのクラスから自由に選びたいコースを選ぶことができました。全5学期のうち、まず第1学期目(8/16-10/6)には数学、物理学、英語、美術、日本語のコースを選択しま

した。主に数学ではこのとき幾何を、物理学では力学を、美術ではデッサンの基礎について学びました。英語では、世界有数の英語大国フィンランドの実力を肌に感じ、かなり大変な思いをしました。しかしこの、ある意味でつらかった経験は今後かなり役に立ってくれるのではないかと考えています。日本語のクラスでは先生のアシスタントとして、たまに他の生徒の質問に答えたり発音の見本を引き受ける事もありました。このクラスで一番印象に残っているのは、先生の日本での勤務先、慶応普通部中学校の生徒さんたちと動画の skype を用いてリアルタイムで異文化交流をしたことです。この時の日本語の担当の先生には半年後に日本に帰国なさるまで、後々あらゆる面でお世話になりました。

約 1 週間後から相次いで、2 つの初心者向けのフィンランド語塾が始まり、そこでできた留学生の友達からは留学生活を通じて良い刺激を受けました。バスケットボールクラブにもほぼ同時期から 1 歳年下のホストブラザーと通い始め、後々環境の変化にともなって止めはしたものの、愉快的なチームメイトと一緒に汗を流すことができました。後半には精神的な支えのひとつとなり、冬の極端に短い日照時間によってふさぎ込みがちな気分をリフレッシュする効果もあったと思います。フィンランドについてから、約 1 ヶ月がたち、少しフィンランドという国について目を向ける余裕が出てきて思ったことは、フィンランド人はコーヒーをとにかくたくさん飲むということでした。ことあるごとに「ユオトコカハヴィア？」とコーヒーを飲むかどうか聞かれ、お菓子と一緒によく勧められました。統計では世界 1 位の 1 人当たりコーヒー消費量を誇る国だとの事でした。1 人 1 日あたり約 3 杯のコーヒーを平均で飲むそうです。これはフィンランド人のひとつの非常に大きな特徴でしょう。

そして季節は秋になり、コートなど羽織るものがないと少し肌寒く感じるようになってきた頃 2 学期 (10/7-11/30) が始まり、スペイン語、歴史、社会、心理学、英語のコースを新たに選択しました。スペイン語は中国語、英語、ヒンディー語に次いで話者人口が多い言語なので何とかものにしようと思っていたのですが、僕にとって第 3 外国語のフィンランド語で第 4 言語に相当するスペイン語を学ぶのはとても難しく感じました。しかし、単純なフレーズや簡単な文法知識を身につける事はできました。多くの英単語や地名がスペイン語由来な事や、少なからず、世界中の日本を含む多くの国がスペイン語圏の影響を受けていることを考えると、無駄ではなかったのではないかと思います。いつか役にたってくれるといいと思います。歴史ではヨーロッパ史を、社会学では社会学の基礎を、心理学ではフロイトの精神分析学の基礎を学びました。

そして 11 月中旬、早朝の気温が氷点下を下回りはじめ、雲に隠れて太陽がほとんど顔を出さなくなり、初雪を観測しフィンランドでは冬の始まりを予感させる頃、常夏の国ポルトガルにホストファミリーと旅行に行ってきました。同じヨーロッパ地方の中でもここまで気候に違いがあることにまず、驚きました。観光やビーチに行って海水浴を楽しみ、とても素晴らしい時間を過ごしました。帰りの飛行機の中では、ホストブラザーとフィンランドに帰りたくないと言い合っていた事を記憶しています。さらに月日は流れ、フィンランドで最大のイベントのクリスマスと、大晦日を迎えました。クリスマスのお昼は教会でホストファミリーとある程度厳かに過ごしましたが、その夜はやはりサンタクロースで有名な国だけあってサンタのコスプレをしたおじさんが家に来ました(有償)。1 番下の子はまだ 7 歳でサンタの存在を信じていると聞いたときは、日ごろよくけんかする仲でしたが、ほほえましく思いま

した。その日はたくさんのお菓子などのクリスマスプレゼントに囲まれ、幸せな気持ちで過ごしました。この時期はどのフィンランド人もかなり体重が増えるそうですが、僕もクリスマスプレゼントでもらったグミやチョコレートなどのお菓子だけで 5000kcal を超え、その後かなり不健康な生活を送る事となりました。大晦日は他の仲のよかった留学生と晩御飯を食べに行った後、フィンランドでは伝統的な打ち上げ花火をあげに近くの高台まで行きました。日付が変わってから、氷点下 10 度程度の雪も降る寒空の中、たくさんのお花火がいろいろなところで上がり始め、とても新鮮に感じました。また僕は、この日だけは日本人としての習慣も欠かしませんでした。紅白歌合戦です。見たかった歌手の曲を AM ラジオやネット上で苦労して検索して見れた時、初めてやっと心から年越しを実感しました。日本のみかんにかなり味が似た品種のオレンジもこの日は食べれて幸せでした。大晦日の約 2 日前には冬至を迎え、僕の町では 5 時間弱にまで昼の長さが短くなってしまい増した。冬は分厚い雲が絶えず空を覆っているため、日照時間で言えば 12 月の平均は 1 日 30 分程度だったように記憶しています。この頃から極寒期が明けると体の調子が少しおかしいと感じることがよくおきるようになって来ます。今思い返すともしかしたら軽い季節性うつだったのかもしれない。

そして 1 月、僕の誕生日を迎え、ついに留学もとうとう折り返し期間に来ました。留学前からのホストファミリーとの約束の期間が過ぎ、次の家庭に配属されることになりました。この後もちょくちょくいろいろな所に行ったりはしましたが、半年間一緒に過ごした人々とお別れと思うと寂しかったです。次のホストファミリーは少々特殊なお家で、子供たちを養子に近い形で 6 人も受け入れている家庭でした。血はみんなつながっていないので僕だけ疎外感を感じることは無かったですが、その家庭ではみんなが家族というより施設という意味合いが強かった様に感じます。

第 3 学期(12/1-2/7)は宗教学 2 つと英語を 2 つ、世界史を学びました。宗教学のうちのひとつは英語で宗教について議論することを主目的にした授業で、もうひとつは世界の様々な宗教について学ぶ授業でした。英語はこの時期になると、まだまだ表現の幅は狭いものの何とかいろいろな事を表現できるようになって来ました。世界史では、近代史について学びました。歴史の解釈の仕方は多様であることを強く意識しました。

2 月、フィンランド語で極寒の月を意味するこの季節は今までに到底体験した事の無かった極寒を経験しました。凍えるほど寒くまた、短時間肌を露出するだけでもやけや凍傷になりかねないので必然的に家に引きこもりがちな生活になるという、かなり肉体的にも精神的にもつらい日々でした。ちょうどこの季節に、ラップランドに AFS の他の留学生と共に旅行に行きました。ラップランドのロヴァニエミで人生初の氷点下 30 度を経験しました。何十人もの新たな留学生との出会いがあり、とても充実した旅行だったと思います。しかしラップランドでオーロラを見ることはフィンランド留学のひとつの目的だったのですが、ほぼ唯一の機会にも見る事ができず、とても残念でした。そしてその旅行直後、学校でのダンスパーティーが開催されました。僕のパートナーはトルコからの留学生でした。約 30 分間ダンスの演目を変えながら踊り続け、約 3 ヶ月間毎週の練習の成果を見せることができたように思います。

第 4 学期(2/8-4/5)は数学 2 クラス、物理学、音楽、保健を選択しました。そして最終学期となる

第5学期(4/6-6/2)は数学2クラス、物理学、英語、美術を選択しました。音楽はフィンランドの継承音楽を、保健は性に関して、美術は主にルネッサンス時の作品の模写を行いました。英語は留学生活を通じて力を入れてきた集大成として、満足のいく結果が出せたと思います。数学では、解析、微積分、数値演算法、高校数学の総復習の計4クラスを履修し、物理は、力学、電磁気の基礎を学びました。数学、物理などの自然科学に関しての日本とフィンランドでの教育の違いでまず挙げることができるのは、体系的かどうか、だと思います。フィンランドでは一般に、体系づけて教えることよりも生徒に興味を持ってもらう事をより重視しているように思います。逆に日本では、比較的には体系的に教えることにより、理解のしやすさや効率を重視しているのではないかというのが僕の持論です。この季節は、冬から一気に春を介さずに夏になったという印象を持っています。サマータイムの導入や、昼の長さ、日照時間が一気に長くなり、気温も劇的な速さで上昇しました。それにともなって、体調も気分もかなり上向き始めました。そしてついに、1年間の学校生活を修了し終業式の日がやってきます。僕はそこで他の留学生と一緒にフィンランド語でスピーチをすることになっていました。スピーチは概ね成功を収め、特に大勢の前に出てあがらなくなったところには自分の成長を実感しました。

学校が終わると夏休みに入りました。フィンランドの学生は普通、6月から9月まで3ヶ月間のバカンスを楽しみます。この期間には僕は仲の良かった友達とお別れとしてトゥルクの近くにあるムーミンランドや映画を見に行ったりしました。また、友達の中の日本のゲーム好きの人と一緒にゲームをしたりしました。日本のゲームはフィンランドでも、とても人気です。フィンランドの学生の中ではメタルロックもかなり人気があり、夏はいたる所でロックフェスが開催されていました。帰国直前には夏至を迎え、太陽は沈みこそしたものの、一日中明るいという日を体験しました。

そしてついに長かった留学生活も終わりを告げ、8月26日、日本へ帰国の日を迎えました。思い返してみると、フィンランドから日本に帰りたいと思った事は数え切れないほどありました。しかし帰国の日にはフィンランドへの強烈な愛着がわき、強く帰りたくないと思っている自分に気がつきました。空港で、同じくフィンランドに留学した日本人留学生と久しぶりに再開すると、それぞれ成長した姿を見ることができました。留学期間を通じて各々、何かしら得るものがあつたのでしょう。帰りの飛行機の中ではいろいろな話を交わすことができました。そしてとうとう日本の土を踏んだ時、懐かしさよりも先に、大きな達成感を味わいました。今では留学してよかったと心から思います。

報告は以上です。最後にフィンランドでお世話になったミラン一家、スホネン一家、ルオスタリブオリ高校の先生方、フィンランドと日本双方のAFSのスタッフ、富山高専での1、2年次担任長谷川先生、3年次担任池田先生をはじめとする諸先生方に感謝の意を表したいと思います。